



鳥瞰。敷地は市街地とオオタカが営巣する森に隣接する。



アクティビティホール。道路に面し、町と繋がる。



こども図書館。風のみちに面する。様々な交流が生まれる。



「風のみち」。風・緑・人を誘う。写真手前の前面道路と約60度の角度を持つ。



# 流山市立おおたかの森小・中学校、 おおたかの森センター、 こども図書館

## 選評

流山市は、つくばエクスプレスの開通によって首都圏へのアクセスが良好になり、また自然環境にはきわめて恵まれ、子育て支援施設も充実しているという理由から、現代の少子高齢化の時代に移住による子育て世代人口が増えつつある地域である。本施設は小中併設校の最大児童生徒数が一、八〇〇人と、いう大規模な学校と公共施設が複合化された、延床面積二二、〇〇〇平方メートルの建築であり、小中併設校に加え、地域交流、学童クラブ、こども図書館などが併設されている。今後の学校教育をどのように捉えるのか、さらにはこれから成

熟してゆく街において学校と地域との関係性をどのように形成するのかといった課題と共に、二十一世紀の学校のあり方にチャレンジした建築である。

「L壁」と呼ばれるL型の壁が、小中学校の教室群の基本的な構成要素であり、同時にこの建築の基本構造にもなっている。これらが「離散的に配置」されることで全体の統一感を保ちつつも、それぞれの教育主旨を尊重した空間構成が可能となる。また、「L壁」以外の非構造壁には可動する建具を採用したり、家具でフレキシビリティを適宜持たせることで、独立した教室、あるいはオープンスクールのような、多様な教育ニーズに対応できるよう工夫されている。

地域の風向きに配慮した結果、「L壁」は前面道路から約六〇度振られて建ち、全体を構成するグリッドは、道路および向かい側の住宅地とは正対しない配置計画を実現している。しかしその結果生まれた雁行した建築の表面積は大きく、また建物は横方向に広がり、加えてボイドスラブの採用なども

BCS賞は、建築の事業企画・計画・設計、施工、環境とともに、供用開始後1年以上にわたる建築物の運用・維持管理等を含めた総合評価に基づいて選考し、建築主・設計者・施工者の三者を表彰する建築賞です。この賞は、1960年にはじまり2016年で57回を数えます。

< 2016年 第57回 BCS賞受賞作品 > 飯野ビルディング 大手町タワー／大手町の森 京都国立博物館 平成知新館 グランフロント大阪 高志の国文学館 ザ・リッツ・カールトン京都 住田町役場 東京スクエアガーデン 流山市立おおたかの森小・中学校、おおたかの森センター、こども図書館 日清食品グループ the WAVE 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT 八幡厚生病院本館 山梨学院大学国際リベラルアーツ学部棟 Ribbon Chapel 龍谷大学 和顔館 [特別賞] 札幌市北3条広場・札幌三井JPビルディング 日本橋室町東地区開発：室町東三井ビルディング、室町古河三井ビルディング、室町ちばぎん三井ビルディング、福徳神社

# 建築主

魅力ある流山の教育  
より ～学力・気力・体力の3つの柱を軸として～

本校は、豊かな自然、光、風を取り込む設えとなっており、教室ゾーンにおいては学習スペースや落ち着いたあるコーナーを大切にしながら、広いデッキや全面開口折戸によって、学校全体が開放感のある児童・生徒の活動の場となっています。また、地域住民も利用しやすい施設として、地域交流の場としておおたかの森センター、こども図書館をはじめ、ランチルームなど新しい学びの場として、

森とまちを繋ぎ、街全体へ学校としての活気があふれ、地域の核となる学校となっています。

市内初の小中併設校として、児童生徒の交流や教職員の連携により、小中学校での学びの連続性を考慮した学習をより効果的に進め、小中の繋がりを基に教育を行っています。「学ぶ子にこたえる流山市」として、この学校を核として教育行政に取り組んでまいります。



流山市役所  
流山市長  
**井崎義治**  
Yoshiharuru Izaki

# 設計者

木立の広がりによりアクティビティが見え隠れする。風と光に应答する建築



株式会社シーラクス  
アンドアソシエイツ  
代表取締役  
**赤松佳珠子**  
Kazuko Akamatsu  
**小嶋一浩**  
Kazuhiro Kojima

森のように離散するL壁が空間や環境、人々を緩やかにつなぎ、アーティキュレートすることで、建築的な構築の方法を都市的な規模まで昇華させ、新しい建築をつくれるのではないかと考えました。

動線のスパインである「風のみち」を街と森を繋ぐように通し、積層された「体育館」、森を切り取ったような「森のにわ」、小学校低学年のための「遊びのにわ」、これらのスケー

ルや様相が異なる空間がL壁の教室群のなかに現れ、デッキテラスや木々の間から子どもたちや地域の人々の活動が見え隠れする。

様々なプログラムが集結する複合体が、森のような空間によって全体像を結び、ゆるやかに秩序づけられた都市のように現れる。学校を中心とした複合施設として地域社会の核になることを期待しています。

# 施工者

手作り感に溢れた  
とても開放的な学校ができました

当建物は、地上3階建て延床面積が22,000㎡という、横に広く複雑な形状で、上棟から仕上げ完了までが4カ月と、もとより非常に厳しい工程でした。また、南側は敷地境界建物が近接しており、施工エリアを確保するため、アクティビティホールを後施工としたところ、これがクリティカルとなりました。打開策として、工事途中で仮設計画を見直し、ジブクレーンを新たに設置することにより北

からのサービスを可能とし、アクティビティホールの工事着手を1カ月前倒しにすることができました。

「風と光に应答する」開放的な学校を目指す建築主と、細部にまで拘る設計者と、三人四脚で駆け抜け、その熱い思いを形にすることができました。工事に携わったすべての方に感謝致します。



株式会社大林組  
東京本店  
LIXIL野田工事事務所  
所長(現職)  
流山小中学校工事  
事務所 所長(当時)  
**渡辺謙一**  
Kenichi Watanabe



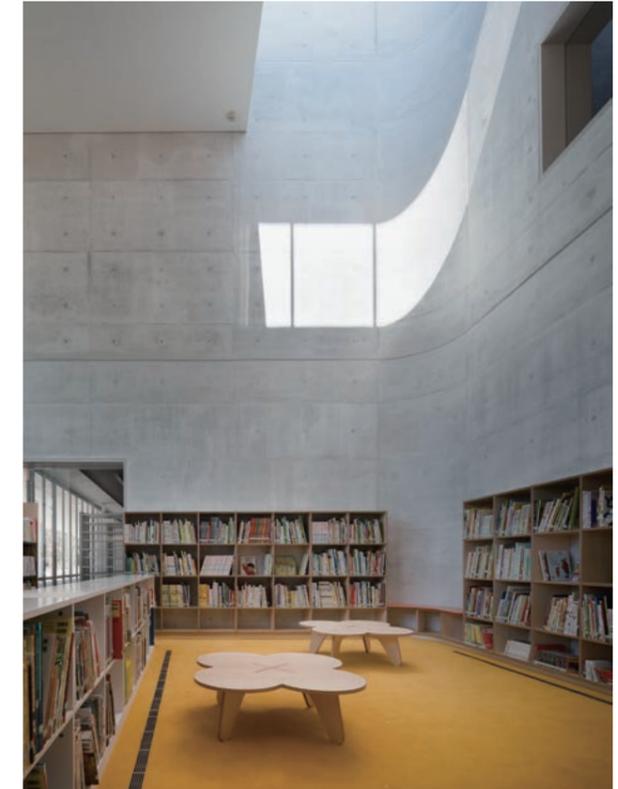
小学校オープンスペース。空間が緩やかに連続する。



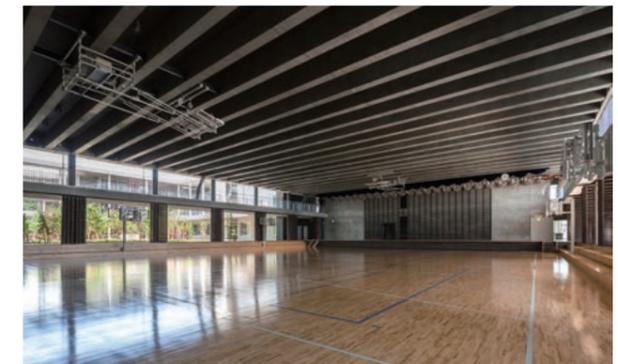
中学校オープンスペース。折戸により外と繋がる。



第二屋内運動場。明るい屋内広場。



こども図書館。光が降り注ぐ読み聞かせコーナー。



第一屋内運動場。街と大きな軒下で連続する。

含めると、短い工期で完成させたスケジュールはまさに、施工サイドとの連携なくしてはあり得なかったと言える。

アクティビティホール、音楽ホール、ランチルームなどが前面道路に面して配置され、学校建築が新しい地域社会の交流拠点を持つことで地域に開かれた学校になることを目指している。こども図書館は建物の中央に置かれ、小学生と中学生、地域の人びととの結節点となるよう意図されている。また複合施設のメリットを活かし、各管轄機関との調整のもと、領域を明確に保ちながらも視線の通る可動建具の採用により区画を越えて空間を利用するなど、多様な使い方ができる提案が組み込まれている。二十一世紀における「風と光に应答する」開放的な学校建築は、すべてを機械設備に頼らないという運営方針のもと、今後の教育施設のあり方のモデルとなることだろう。

【選考委員】  
木下庸子・佐野吉彦・栗山茂樹